書　評

環境リテラシー
—市民と教師の環境読本—

稲生　勝 · 岩佐　茂 · 大日方聰夫 · 吉埜和雄　著
リベルタ出版 2009 年 12 月発行
A5 版 222 頁 ISBN 978-4-903724-18-8 C0036 定価本体 2,400 円 + 税

良い和訳がないリテラシーである．環境問題の基礎知識といった方が通じやすいか．

科学や技術は対象を絞り込むことで非常に発展してきており，総合的な視点というのは重視されてこなかった．したがって，環境問題に対しても，個別の科学，技術の分野での対応をまず考える癖がついている．特に，現在の地球環境問題に対しても，技術革新の向上で克服できるという宣伝がまかりとおっている．

本書は，1 章「生物がつくり変えた地球環境」，2 章「地球規模の環境破壊」，3 章「地域環境としての公害」，4 章「経済活動の中の環境問題」，5 章「環境保全に向けて」そして終章からなる．はじめの 4 章についても対象範囲が非常に広い．農業，食料と環境問題は 2，3 章の一部に触れているだけで，農学の立場からはちょっと物足りない．

長い歴史に耐えてきた伝統農業は環境に優しいだろうことは理解できるし，現在のような化石燃料の使用では将来はないという主張もよく分かる．しかし，それではどのように行動すべきか，ということになると，多くの人は口ごもる．今の我々にとって一番大切なことは 5 章であろう．科学が少数の人々によって引っ張られ発展してきたのと同じく，環境を守るための行動も先見の目のある一部の人によって始まり，だんだんと普及し，普遍化してきた．国連の活動は我が国の動きよりもずいぶんと早くから行っていたことにも気付かされる．

原料から製品を作ることに我々は熱心であったが，製品を原料に戻すことには，ゴミの山に囲まれるまで興味が無かった．環境問題には，物事を単純化するという従来の科学や技術の発想では解決できないことが本書を読むとよく分かるだろう．

なお，本書は，2003 年に出された同名の本の第 2 版である。

長谷川周一（北海道大学大学院農学研究院）

2010 年 5 月 17 日受稿　2010 年 5 月 18 日受理
土壌の物理性 115 号, 62–62 (2010)